

## 19～20世紀東北アジア「ユートピア」研究序論

### Introduction for the Study of Utopian Thoughts in Northeast Asia in the 19th～20th Centuries

山 田 勝 芳

# 19～20世紀東北アジア「ユートピア」研究序論

## Introduction for the Study of Utopian Thoughts in Northeast Asia in the 19th～20th Centuries

山田 勝芳 (Katsuyoshi YAMADA)\*

キーワード：ユートピア的理想、東北アジア、地域の在り方、19世紀・20世紀

Keywords : Utopian Thoughts, Northeast Asia, visions for the region,  
the 19th～20th centuries

### 1. はじめに

21世紀の今日、アメリカが主導するグローバリズムが世界を覆っているかにみえる中、宗教的理想・原理に即した国家形成をしようとする動向が顕著な国々もあるが、理想やユートピア的理念をもって、国家ひいては世界を変革してその理想を実現しようとする理想主義は絶滅したかにみえる。特に1990年代初頭のソ連・東欧圏の崩壊は、共産主義という19世紀後半から20世紀末までの世界を大きく揺り動かした政治的ユートピア思想と、1917年以来地球上に広い範囲で現実存在した「理想」的体制の、全面的崩壊を意味したと思われた。現在のにも、本稿で対象とする東北アジアないし近辺においては、中国（中華人民共和国）・北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）・ベトナム（ベトナム社会主義共和国）という共産主義政権の独裁が続いているにもかかわらず、もはやそのような認識は世界的にも定着しているといつてよい。これに対しては、資本主義諸国の経済学者たちの多くに、自由主義・資本主義・民主主義という普遍的理念の勝利であり、共産主義は長い人類史の部分的イレギュラーにしか過ぎない、という理解が広がっているといわれる（注1）。

それというのも、中国では共産党による政治的支配の強化は依然として進められているが、国際化・情報化・市場経済化はもはや止めようがなく、またやや遅れて急激に市場経済化・国際化を進めたベトナムも同様であり、さらに、最も強固に第二次世界大戦後成立した国家体制を維持しているかにみえる北朝鮮にしても、市場経済化への道を踏み出したかにみえるからである。もちろんこの世界的大変動によって、マルクスの資本主義の分析や彼によって掲げられた共産主義的理想そのものが全く無意味なものだったし、もはや人類社会から消滅してしまったということにはならない。共産主義的理想が強く打ち出した平等主義（共産主義政党的独裁政権において現的にみられる権力の有無による階層的不平等といった現実についてではなく、

---

\* 東北大学東北アジア研究センター

あくまでも理念についてだけであるが)、計画経済は、様々なチャンネルを通じて20世紀の諸国家に影響を及ぼしたし、今も及ぼしている。

そしてグローバリズムへの反作用として、ともすれば統御不可能な「妖怪」になりがちなナショナリズム・民族主義が噴出して、各地域の大きな不安定要因となっている。それは東北アジアにおいても顕著にみられる。モンゴル（モンゴル国）では、2006年をチンギス・ハン即位800年として国を挙げて祝い、ロシア（ロシア連邦）では、1990年代後半までの経済の極端な落ち込みから、石油・天然ガス（及び木材・金・ダイヤモンド等）という資源輸出によって経済が回復し、その自信を背景として「強いロシア」を主張するに至っており、中国・北朝鮮・韓国・台湾等でもそれぞれにナショナリズム的動向が顕著となっている。日本においても、靖国問題・愛国問題に象徴的な動向がみられ、それが同時に日本と他国とのキャッチボールのような複雑な相互反応を引き起こしている。ナショナリズムや民族主義自体は、国民国家（Nation State）統合には不可欠な要素ではあるが、それは異質な存在や外国に対しての不寛容と強い排撃的・排外的性格を帯びやすい。場合によってはテロを背後に伴いかねないこのようなエキセントリックな言論・動向に、マスコミは弱いし、政治家も、そして知識人も弱い。

このような各国の動向の中で、それぞれの民族的・国家的アイデンティティを強化しようとする政治と文化政策がとられ、観念・意識操作が図られる。たとえば、漢族の各地域への浸透と圧倒的な人口数による領域内の安定的統治をはかる意図を背後にもっている中国の「中華民族」論が、その典型である。それらは、現在の国家、支配状況を強く意識しつつ、現支配に適合的な歴史認識を国民に示しながら、様々な神話をつくりあげ、また政権が国民の支持を得ることができるような理想や将来像を示すことで、改めて国家や民族の結合・統合を強化しようとする動向であると、とらえることができよう。

多様な形でみられるユートピア的理想は、各国家・各地域の歴史認識や正統観念といったものと深く関係しており、これらが現実政治やマスコミ・民衆の主張や観念を裏打ちしている。同様に様々な政治理想もユートピア思想と密接に絡み合いながら、現実政治のシステム構築や社会諸制度に影響を与えている。「現実にはどこにもないが、人為的になしうる理想的状態」への行動を伴い、人々の意識に影響を及ぼすユートピア的理想は、宗教的理想世界とも密接に関わりながら、「現実」そのものよりも、人々を大きく突き動かしてきたし、今もそうであるといえる。

このような意味合いを有するユートピア的理想・政治理想を、現在的に東北アジア各地域の在り方を強く規制している各国家・各地域の歴史認識と現実認識、アイデンティティ、政治的理想・政治的神話等々について具体的にみたならば、それらには過去の大小様々なユートピア的理想が大きな刻印を及ぼしているということがみえてくるのである。本稿は、ユートピア的理想と現実との往還、過去と現在の往還を繰り返しつつ、東北アジアにおいてユートピア的理

想が関わった多様な側面と諸問題を解明しようとする本研究の基礎作業として、まずユートピア概念そのものの検討を中心とした究明を行おうとするものである。

本論に入る前に、何が問題になるかについて具体例をあげたい。それはロシアのシベリアの南部に位置するアルタイ共和国などのアルタイ地域であり、同地域にみられるユートピア的理想や観念等について考えることで問題の概要を示しておきたい。

## 2. ロシア・アルタイ地域の「地域の在り方」

アルタイ共和国（注2）は、ロシアとカザフスタンの国境にある標高4506mのペルーハ峰を最高峰とし、ロシア・モンゴル・中国国境に聳える標高4374mのナイラムダール（中国名「友誼峰」）から、モンゴルに東南に延びるアルタイ山脈の北麓に位置する地域である。この地域は人口20万人余であり、ロシア人（63%）、チュルク系諸語のアルタイ人（31%）及びその他カザフ人等が住む。その東隣にはやはりチュルク系諸語のトゥヴァ人（64%）とロシア人（32%）等が住む人口約30万のトゥヴァ共和国があり、このトゥヴァは13世紀以降モンゴルの支配下にあったためにモンゴル語の影響もみられるようである。トゥヴァは、ジュンガールが清に服属して以降、ウリヤンハイとして清の支配下（ホヴド参贊大臣管区）に入った〔オチル・オユンジャルガル 2005〕。清滅亡後1914年にロシアの保護領となって、さらにソ連の一部として組み込まれた歴史を有する。トゥヴァの西に位置するアルタイ共和国の地域もモンゴルによる支配や清のモンゴル支配の影響を受けざるをえなかったとみられる。このウリヤンハイ地域に対しては、中華民国は領有権を主張して、官製「中華民国全図」ではモンゴルとともにその領域に含めてきた。ただし、2004年以降は同全図では、実際に台湾政府が領有していない大陸等の地域を入れないこととしている。

このアルタイでは、井上紘一によると、1904年5月、33歳のアルタイ人牧民チョト・チェルパンの前に現れた白衣の騎士が、「オイロト・ハーン」であると名乗り、まもなくアルタイ人の前に現れると告げ、それがアルタイ地方の現住民を動かして「ブルハニズム」というアルタイ人の世直し運動が展開される端緒となったといわれる〔井上 1997〕。そこには、チベット仏教を中心とするモンゴルの様々な影響が考えられるようである。そして「ブルハニズム」は今でもアルタイの人々に影響を与えているといわれる。これは一種の民族的メシア待望論であり、メシアによるユートピア実現の運動ともいえる。

しかもこのアルタイ地域に関わるユートピア的理念はこれだけにとどまらない。中村喜和によれば、ロシアの旧教徒たちがアルタイ地域を緑と水の豊かな風光明媚な土地の広がるユートピアとして理想化し、現実そこに移住してきた歴史があるからである。しかもそれにはロシアの宗教事情が絡み合っていた〔中村 2003〕。

ロシア正教会に属さない旧教徒は、公式統計では19世紀を通じてほぼ100万人であったとい

われるが、分離派とも言われる正教会に属さない人々、あるいは表面だけ属しているいわば「かくれ信徒」たちは、900万から1,000万ともいわれ、ほとんどが農民であった。彼らは正教徒の2倍の重い人頭税を課税されることもあったし、教育を受ける途も閉ざされるなど、ロシアにおける少数派として過酷な社会的状況に置かれていた。彼らの間にはペロヴォージェ＝「白水境」伝説というユートピア伝説が広く流布していた。これは『日本国への旅案内』と題されたものによると、日本が迫害を受けている旧教徒の安住の地、ユートピアとしてのペロヴォージェと目され、この日本に至るルートも書かれていた。このペロヴォージェはまさに東方の理想郷である。

中村によれば、一挙に日本に至る前に、まずアルタイ地方こそが理想郷ペロヴォージェとしてヨーロッパ・ロシアの農民たちに知られていたという。アルタイ特に、オビ川の大支流イルティシ川の上流の一つブフタルマ川峡谷（現在はカザフスタン）がそれであり、さらに高い山々を北に越えたオビ川上流の一つカトゥン（カトゥーニ）川峡谷もそれに含まれた。このカトゥン川は現在のアルタイ共和国を流れる川である。日本的表現で言えば「山紫水明」で、豊かなステップも広がるこの地域こそがペロヴォージェ＝白水境にふさわしかったのである。

そして、19世紀後半だけでも5万人以上のロシア人がアルタイ地域に移住したし、現在でもロシア人はアルタイ地域をあこがれの地としているようである。また中村は、満洲国時代、ロシア人集落の一つで旧教徒が住んだロマノフカが有名となり、「北満のユートピア」「アジアの桃源郷」とも呼ばれたことを紹介している。旧教徒は満洲、沿海州、サハリン、そして函館などにも居住していたようである。これらの旧教徒たちは、ロシア革命後の混乱の中にあって信仰を維持するために移動した人々も多かったであろう。アルタイ地域に移住した旧教徒のロシア農民にも、アルタイを越えて中国に入り、あるいは東方へ移動した上でモンゴルないしアムール川を越えて満洲等々への移動をしたものもいたことが考えられる。

そして現在、この地域のアルタイ人は、自らのアイデンティティ、民族意識を強化しようとしており、そういう動向の中でたとえば紀元前500年前後のスキタイ系騎馬遊牧民族によるバジリク文化の墓から発見された女性ミイラ問題も生じた。

アルタイ地域で、ロシア科学アカデミー・シベリア支部の考古学民族学研究所が、1993年に女性ミイラ、1994年に男性ミイラを発掘した。同研究所のパウロ副所長によると、研究所も当初、この女性ミイラを高貴な女性だと考えていたけれども、現在は中程度の身分の女性と考えているとのことである。当初、高貴な女性とし、それを積極的に打ち出した背景には、1991年のソ連崩壊後、経済が混乱し、GDPが半分近くまで落ち込みつつあり、アカデミーの経費も大幅に削減されていたので、すばらしい発掘成果を強調することは研究所にとって不可欠であったためでもあろう。

しかもパウロ副所長の話では、アメリカのジャーナリズムが、この女性ミイラを高貴な身分

の女性としてセンセーショナルな報道をしたため、地元のアルタイ共和国の人々、特にアルタイ人が自分たちの祖先のプリンセスなどとして、国外移動の禁止などを要求するようになり、そのため現在、この地域での発掘調査にも支障が生じているようである（注3）。アメリカが大きな関心を示した背景には、アジアからベーリング海を通過してアメリカ大陸に渡り、一気に南アメリカのマゼラン海峡まで広がったモンゴロイドの移動問題があったようである（注4）。つまり南北アメリカのモンゴロイドの祖先の系譜に連なると考える向きも出てきたからであろう。民族主義的歴史認識は、科学的な考古学的説明を飛び越して、起源神話化してしまう可能性さえもちうるのである。

ここには、すぐに自らのロマンを馳せることに急な、あるいは「祖先」をアイデンティティ強化に結び付けてしまいがちな社会・マスコミや民族主義的歴史理解の中であって、考古学的発掘成果の公表の仕方の難しさが示されている。と同時に、民族主義が常にその起源論・歴史認識と結びつきがちであること、そしてそれは現在の的に極めて大きな政治的意味をもちうることを示している。

アルタイ共和国は、ロシアの中でも地域的には狭く、かつ経済力も弱い地域ではあるが、そこに少しでも踏み込んだ場合、長期にわたる人々の移動やロシア・中国・モンゴル・日本等の動向と絡んで、極めて複雑な民族意識、宗教問題（ロシア正教、旧教徒、シャーマニズム、モンゴル経由チベット仏教、イスラム等）、ロマン主義、ユートピア観念、歴史認識、民族主義が歴史的にも重層化し、現在のこの地域の「在り方」を様々な側面で規定している様子が浮かび上がってくる（注5）。しかもそこには日本との関わりも見え隠れするのである。

この具体例に示されるように、各国家・各地域においては、その民族的・宗教的・政治的・社会的状況によって多様なユートピア的理想や政治理想を育み、あるいは変容させてきた。そして、このような現在につながる「過去」が織り込まれるのみならず、多様な「未来への願望」等もないまぜられ織り上げられる。これが国民・民族・地域の人々の歴史認識や多様な情念・観念、あるいは政治的言論に大きく影響する。これらの複合的状況が、各地域の特にメンタルな部分の「在り方」を示していると考えられる。

しかも、この東北アジアにおいてはいずれの地域においても、19世紀後半から20世紀前半の日本のアジアへの膨張と影響とが深い傷痕・影響を残しており、民族主義・ナショナリズムが煮えたぎったときに、この傷痕が大きくうずき、「過去」が表面化する。このことが、自然地理的・歴史的に日本がその中に位置し、かつ複雑な相互関係のある、東北アジア地域と日本との関わりを理解するための鍵として、ユートピア的理想と地域の「在り方」を究明することが必要不可欠な理由なのである。

このような本研究の研究目的を遂行するために、序論たる本稿では「ユートピア」という言葉の歴史を振り返ることで、主として日本で用いられてきた「ユートピア」概念を再検討し、

本研究で用いる「ユートピア」語義の幅を示したい。

### 3. 西欧のユートピアと各種政治理想の諸相

「ユートピア」という言葉自体は、いうまでもなく西欧の歴史が生み出したものである。そのため、研究者によっては、アジアでみるべきユートピア思想・理念はあまりなく、せいぜい『老子』の「小国寡民」、あるいは「桃源郷」、さらには康有為の「大同」理念程度しか取り上げない場合もある。確かに分厚い伝統を有する西欧のユートピア思想・理念が、世界的にみて太い流れを形作ってきたことはだれも否定できないが、アジアにも様々なユートピア的思想・理想はあった。たとえば川端香男里は、西欧の伝統とは異なる、ロシアやアジアの「ユートピア」も丹念に拾い上げている [川端 1993]。とはいえ、やはり「ユートピア」の歴史的展開そのものを、西欧及びアメリカについてみておくことは、世界の同時進行性、相互影響・連鎖(注6)が格段に強まった19世紀～20世紀前半の東北アジアをみる上でも不可欠である。

#### (1) トマス・モア『ユートピア』以後

周知のごとく、「ユートピア」は、イギリスの大法官（ただし、1515-16年段階は、ロンドン市司政長官補で、法学院講師、同評議員、通商交渉委員など。）であったトマス・モア（1477/78年～1535年）がギリシア語から造語して、『ユートピア』（1516年冬初版）を出版してから広まった言葉である。これについては、まず、モアの造語 *Utopia*（無何有郷）は、*ou*（ない）と *topos*（場所）との結合によるものであり、*eu*（善い）と *topos* の結合による *Eutopia* エウトピア（楽園）との関わりも生ずるものと理解できる（注7）。

モアにユートピア島の存在とその詳細を語ったとされるヒュトロダエウスの親戚である桂冠詩人のアネモーリウスが作ったとされ、『ユートピア』の冒頭に掲げられた「ユートピア島についての六行詩」は、次のように詠う。

われ孤島なればこそいにしえに無可有郷（ユートピア）とぞ呼ばれける。

されどわれいまプラトンのくにとともども競いあう。

いな、そをしのぐともいうべきや。そはいにしえの哲人が、

言の葉のみにて示せるを、あらわにせるはわれひとり、

人材（ウイリス）、浄財（オベース）、良法（レゲス）の形にあらわにせしものは、このわれひとりなればなり。

さればこそわれ楽園（エウトピア）の名もて呼ばるるべかりけり。

ここに明瞭にユートピアとエウトピアとの関係が示されている。同時に、西欧文化の伝統の中で、プラトンの記した幻の大陸「アトランティス」と、『国家』に描かれた理想国家論が、モアに強く意識されていたことが示されている。

いうまでもなく、プラトンの『ティマイオス』と『クリティアス』に書かれたアトランティ



スの「在り方」と『国家』に示された理想国家論は〔プラトン 1975・76〕、西欧の政治思想全般に極めて大きな影響を与え続けてきた。またアリストテレスの『アテナイ人の国制』では、当時の国制であった古代民主制への批判の立場をもって、「アリストテレスが狭義の「ポリティア」と呼んでいる中庸の財産ある者の中での民主制度、また貴族制、寡頭制の要素と民主的要素とを混合した政体を最も望ましいとする思想」が示された（注8）。他にもギリシア悲劇・喜劇等の中にもユートピア的、あるいは理想的政治への言及もあるが、このプラトン・アリストテレス両者の後世への影響は大きい。

ユダヤ教的メシア論を背景として誕生したキリスト教の布教の中で、「ヨハネ黙示録」に示された千年王国の彼岸での救済観念が広まり、西欧中世の人々の意識に大きな影響を与えたが、現世での王国実現を目指すものはなかった。イベリア半島・シチリア島でイスラムを経由した古典古代文化によって花開いた12世紀ルネサンス以降、再びギリシアの諸思想が流布するに至り、さらに14世紀から16世紀にイタリアを中心とするルネサンスへと連なった。しかも1492年「新大陸」アメリカの発見があり、一挙に西欧世界の視野が拡大したし、また未知の世界であるだけに「ユートピア」としてのアメリカ（後の18世紀には「善良な未開人のイメージ」が宣教師たちによって広められる。（注9））が人々を強く捉えるようになった。これらはいずれも周知の事柄ではあるが、それらがこの「どこにもない」が、現実のネガでもある現実批判の「理想国家」が提示される前史であったといえる。

『ユートピア』では「六行詩」に示されるように、プラトンのアトランティス・理想国家論が色濃く投影されつつも、それらをしのぐ新たな理想の提示（現実への批判）として主張される。『国家』と同様な対話形式ないし戯曲形式で叙述される『ユートピア』は、アトランティスの中央都市メトロポリス（円形で、環状壁と水路で何重にも囲まれた都市とされる）のような、防御性が高い島として描かれる。元は陸続きであったのを切り離し（場所そのものが、隔絶された地域を作り上げようとする強烈な意思で作られた人工的存在）、海側からの攻撃にも多様な防御機能をもって対処できる、他とは切り離された54もの都市がある大きな島であり、そこでは金は不名誉の飾りとされ、宝石類は子供のおもちゃとされており、貨幣が全廃されてから、貨幣に対する欲望が完全に消滅させられたという。そして公共社会（レスプブリカ）を完全に実現した、共有制の公平な社会であるとされる。

法官として現実社会に密接に関わり、16世紀初頭のイギリスの社会的諸矛盾に直面していたトマス・モアのこの『ユートピア』は、以後、絶大な影響を西欧の思潮に与え、汲めども尽きぬ文学的源泉ともなった（注10）。「ユートピア」の流れは、「反ユートピア」の流れも生みつつ、現実の西欧の思潮の流れの中では、文学的作品と政治理想的著作の複雑な相互影響の下、多様な展開をみせた。しかしここでは、ユートピア的場の大・小（世界大～小共同体）に関わらず具体的な社会的実践に向かった、ないしそのような方向性をもって社会に働きかけようと



した動きや集団の理念を中心にもう少しみてみよう。

イギリスにおいては、イギリスのピューリタン革命（1642年）にあらわれた運動が注目される。水平派（Levellers）と呼ばれる党派は、資本主義的経済の拡大の中で、没落しつつあった独立小商品生産者の階級を代表し、19世紀のアナキストと似たところがあったといわれる。また開拓派（Diggers）は、「千年王国」という宗教理念として語られたが、農村のプロレタリアを代表して、明瞭に共産主義的であったとされる〔柄谷行人 2006：100〕。ここに、「千年王国」を現世で実現しようとする動向が始まり、かくして「千年王国」は「彼岸」から「ユートピア」的理念となった。

## （2） 欧米における18世紀以降の展開

liberté、égalité、fraternité（liberty、equality、fraternity）、すなわち自由・平等・友愛（博愛）を掲げ市民革命を起こし、近代国民国家形成への大転換となったフランス革命時期を含む、それ以前の18世紀の動向をみてみたい。自然の光を自ら用いて超自然的な偏見を取り払い、人間本来の理性の自立を促すという意味を有した「啓蒙」主義の時代でもあるが、モンテスキュー、ヴォルテール、百科全書派、重農主義者などの、多くは貴族ないし富裕なブルジョワ出身であるサロン派の「啓蒙哲学者たち」だけではなく、その多くは手工業者や農民などの第三ないし第四身分の出身で、当時の民衆の憧憬を共同体ユートピアとして表現した「匿名の哲学者たち」がおり、メリエ、モレリ、ドン・デシャンらに代表されるとされる(注11)。18世紀のフランスでは、身分制社会の中にありながら、平等社会をめざす一群の彼らユートピストたちが連綿として続いていた。

おおまかにこの「啓蒙」・ユートピスト両者の対立軸をあげると、前者は所有権の合法性をおおむね容認するのに対して、後者は私有制原理を批判の俎上にのぼせ、両者ともに神権国家説を認めないものの、前者が啓蒙君主に期待し、後者は財産共同体の設立、私有制の廃止、平等に基く社会、賢明な統治形態をさかんに構想した。ただし、後者には、私有制を容認して平等社会を築こうとする平等主義者の流れと、私有制を廃止して財産共同体を目指す流れの二つがあった。また、18世紀フランスのいくつかの地方に現存していた集団的土地所有とも言うべき「平民保有」、即ち慣習による共有地や共同体の存在も、決して理想的な平等社会ではなかったが、ユートピストたちに影響を与えた。

大革命時期の若き革命家ルイ＝アントワヌ＝レオン・サン＝ジュスト(1767年～1794年)は、『共和制に関する断想』(1794年)を書き記し、人々に土地所有を保障し、すべての人が労働を義務とし、国家が子供を養育し、社会的従属関係のない、収入の10分の1税と勤労所得の25分の1税だけが租税であるような、フランス革命への遺言、あるいはあるべき理想的な政治体制を書き記したが、まもなくロベスピエールとともに断頭台で処刑された。

レチフ・ド・ラ・ブルトヌヌ（1734年～1806年）は、総裁政府期のユートピストであるが、

『ムッシュー・ニコラの哲学』（1797年）に含まれる「わが政治」にその理想がみられる。その共同体社会では、私有物はすべて共有で、労働が重視され、共同食堂での共食がなされ、生活物資は共同体から支給される。子供は生後1年を過ぎると共同で養育され、それぞれにふさわしい教育が施され、相互性にもとづく道徳を基礎とし、キリスト教的道徳は退けられる。共同体共和国貨幣が、各自の公衆への有益な行為に応じて支給され、これによって社会に私有制の状態に変わらないエネルギーを維持させる。というような理想の提示がなされたが、当時の社会にほとんど影響を与えなかったといわれる。

18世紀フランスについて、植田祐次〔2004〕に依拠しながらその一部について概観してみたが、旧体制の中での平等的社会が模索され、それらもまた理念的バックの一つとなって市民革命へと展開し、旧体制に代る新たな政治体制を構築していきつつあったこの時代に、ユートピア的思考が深められていたこと、しかも現実社会への適応面では実現性を欠いた不完全なものであったにしても、あるべき姿を描いてみせたことの意義は小さくはない。

この18世紀に、主権・国民・領土を政府が統括する国家（State）が形成され、フランス革命以降、19世紀には国民国家（Nation State）が形成されていく。そしてこの「国民」は、市民社会と領域的に同定され、国家がそれに市民権と公民権を賦与する。こうして国民主権観念とともに、国家が国籍を管理し、パスポートを支給し、国家主権という考えが明確化してくる（注12）。領域内の「国民」を等質化する方向性が強まり、「一民族、一言語、一国家」という「国民国家の神話」も生まれてくる。一方では、フランス革命と以後の社会的現実ないし実践を踏み台として、社会改革を大小のレベルで実施しようとする動向も顕著になる。そして、この動向の多くにユートピア思想が関わるのである。

たとえば、フランスのシャルル・フーリエ（1772年～1837年）のユートピア社会主義は、19世紀中ごろにはヨーロッパに広まったが、もっとも熱心に受け入れたのはアメリカであった。1840年代に北部・中西部の諸州で各地方のフーリエ・クラブは熱狂者たちを集めていたし、この40年代に26のフーリエ主義の共同体もしくは「ファランクス」が、新しい社会制度の基本単位であることを宣言した。フーリエの理想的共同体すなわちファランクスは、田舎にあり、仕事場・田畑・文化施設に囲まれた巨大な中央の住居に1,620人が住むものとされていた。フランスでは全く読まれなかったフーリエの思想を、若いアメリカ人学徒アルバート・ブリスベンが1832年にいわば「信仰」してから、急速にアメリカに広められたのである〔ガーネリ 1989〕。

また、ロバート・オウエン（1771年～1858年）は、イギリス産業革命の進行の中で、工場労働者たちが悲惨な環境に置かれていたのを改善すべく、ニュー・ラナークでの共産的協同村の実験を行った。会社経営の実践の中で、労働者を保護する「工場法」の制定を提案し、換骨奪胎されてしまうが、ともかく1819年に成立する。そして1817年以降、居住・教育と農業地区とがグリーンベルトで遮られた工場を有するようなニュー・ラナーク協同村の実験を行ったが、

共同経営者との意見の食い違いの中で、アメリカで新たな協同村建設に向かう。アメリカでは、19世紀初め、モラヴィアン、ゾアー、ラピスト、シェーカーなどの宗教セクトによる共同体が多数あり、特にシェーカーのそれが多かった。フォーリエ主義的共同体が作られる直前の1825年以降、インディアナ州のニュー・ハーモニーでの実験協同村がつくられたのである〔丸山武志 1999〕。なお、現在に残る宗教的共同体村やこのニュー・ハーモニー等は、過去に存在し（今もある）「ユートピア」として人々を引き付ける観光資源ともなっているようである。

その存在自体がヨーロッパの人々からみて「ユートピア」でもあったアメリカは、その広大な領域の開拓・開発と新領土の獲得や工業化のエネルギーに満ち満ちた内部に、このように多くのミニ・ユートピアを出現させたのみならず、「自由」自体に新たな価値を付与してアメリカ的ユートピア・夢の核とする社会意識をつくりあげていく。西部開発と1848年～1857年のゴールドラッシュが、その新たな「自由」を作り上げていく上で大きな役割を果たしたし、"Die Luft der Freiheit weht"「自由の風が吹く」をモットーとするスタンフォード大学が大陸横断鉄道建設の富を背景として創立され、学問におけるアメリカ的自由を追求していく（注13）。

社会的格差の少ない植民地社会から出発し、しかも広大で肥沃かつ資源に富んだ土地が、人々に階級社会のヨーロッパのように「平等」問題を強く意識させることなく、各人の能力による富獲得を是とする「自由」意識を定着させたのであろう。しかしその後のフロンティアの消滅（1890年の米政府の発表）、南北戦争後の工業化の進展、貧富の拡大等々にも関わらず、この自由意識が変わらずに強固に存在してきたこと自体が、アメリカ的<「自由」ユートピア>としうであろう。その目で見える象徴がフランスから贈られた「自由の女神」像である。

再びヨーロッパに目を向けると、カール・マルクス（1818年～1883年）とフリードリヒ・エンゲルス（1820年～1895年）、特にエンゲルスのDie Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft（ユートピアから科学へ—社会主義の発展—）（1883年）によって批判されたフランスを中心とするユートピア社会主義者が重要である。既に述べたイギリスのオウエン及びフランスのフォーリエ、そしてフランスのクロード・アンリ・ド・ルヴロワ・サン＝シモン（1760年～1825年）が代表とされるが、それには、大革命のみならず、後にはパリ・コミューン（1871年）の経験もするフランスでの、18世紀以来の厚みがあるユートピア的思想、前社会主義的思想の伝統があったといえるであろう。この段階以降については、最近の柄谷行人の示唆するところの多い議論をみることによって概観し、マンハイムの「ユートピア」理解も参照しつつ、そこで提起されたユートピアに関わる理論的問題にも言及したい。

#### 4. カント・マンハイム・柄谷行人の「理想」論

柄谷行人は、フランス革命の理念「自由=平等=友愛」を資本=ネーション=国家として捉え直し、以後の展開を言語学者チョムスキーの「未来の国家」（1971年の講演）で提示された国

家の4形態を手がかりとして、19世紀の国家形態の分析から始めている（注14）。

図1（1970年・チョムスキー）

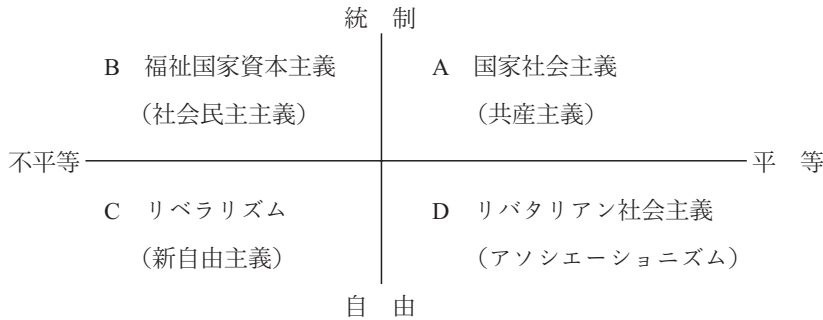
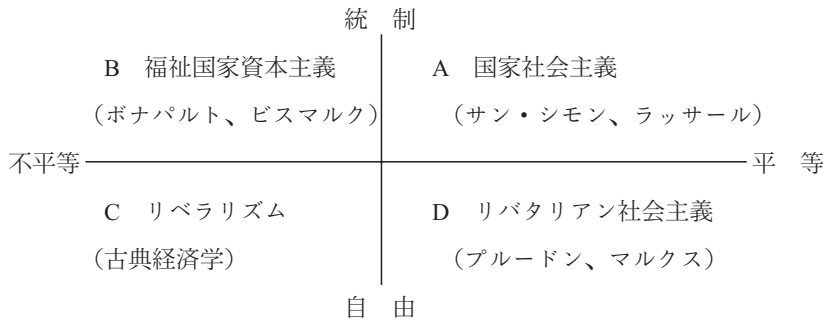


図2（19世紀・柄谷）



柄谷は、1970年段階のチョムスキーによる4形態を図1のように示し、また19世紀（具体的には1848年）の様相を図2のようにして示した。チョムスキーの図1中では、現在、Aは既に消滅したし、AとBへの批判として存在したDも消滅したと、柄谷は考えている。柄谷は、Dを「リベラルな社会主義をめざす」、「現実的には存在しない」「人がそれに近づこうと努めるような「統制的理念」（カント）として機能しつづけ」るものと考えている [柄谷：4-6]。また、カントは、「自然の狡知」（多くは戦争の形をとる）によって成立する、「戦争を防止し、持続しながらたえず拡大する連合という消極的な代替物」としての国家連合の実現を考えていたが、その究極には「各国が主権を放棄することによって形成される世界共和国」という理念（注15）の実現があった。柄谷は「それ以外に国家が揚棄されることはありません」と結論する [柄谷：220-222]。

ここで持ち出されたカントの「統制的理念」については論評する能力を欠くが、カール・マンハイム（1893年～1947年）のナチスの圧迫を受けつつあった時期に書かれた『イデオロギーとユートピア』（1929年）の以下のような言葉に耳を傾けるならば（[マンハイム 1971] 以

下の引用では、[M：頁数]とする。)、「統制的理念」は「ユートピア」と同義としてよいように思われる。

「われわれがユートピア的と呼ぼうとするのは、現実を超越した方向づけのうちでも、とくに、それが行動に移されると、そのつどの現存の存在秩序が、部分的もしくは全体的に破壊されるようなものだけである」。「現に通用し作用している秩序を「トピア」と呼びうるとすれば、これらの希望イメージは、それらが変革機能をおびるところではユートピアになる」[M：309-310]。「特定の存在秩序の代表者たちは、かれらから見て原理的にけって実現されえないような表象を、すべてユートピアと呼ぶのである。」「こういう語法に基づいて、ユートピア的という言葉はまた、今日支配的な副次的意味、すなわち原理的に実現不可能な表象、という意味をもつようになる」。「われわれは、以下断わりなしにユートピアという場合には、いつも、たんに相対的なユートピア、つまり、ある特定の既存の段階からは実現できないように見えるだけのユートピアを考えることにしたい。」「具体的に何がユートピアであるかは、いつも特定の存在段階に基づいて規定されるからこそ、今日のユートピアが明日の現実になりうることもあるのである」。「ユートピア的という概念を規定するのは、いつも現存の秩序と問題なく一致している支配階層であるが、イデオロギー的という概念を規定するのは、いつも現にある現実と生死をかけた緊張関係に立つ新興階層である」[M：314-315]。「新興市民階層のユートピアは、「自由」の理念であった。この理念は、ある点までは現実的ユートピアといえる。つまりそれには、新しい存在秩序の建設をめざして在来の現実機構を破壊し、この理念が達成された暁には、あるところまで実現されるような要素が含まれていた」。「そのときどきの与えられた現実に満足できない場合、人は空想を駆って、「希望の国」や「希望の時代」へ逃避した。さまざまの神話、童話、宗教的な彼岸への約束、ヒューマニズム的夢想、旅行小説等々は、形こそちがえ、いつも実現された生活には含まれていないものの表現であった。それらは、実現された存在を破壊する反作用的なユートピアというよりは、むしろそのときどきの現実像を補足する彩色であった」[M：319-320]。

「ユートピア」と「イデオロギー」を区別したマンハイムは、「ユートピア」をレッテルとして貼るのは、政治面・思想面等における何らかの現実の「支配階層」であること、現在的には理想的希望的な形でしか示されていないが変革機能をおびて現実化するイメージをユートピアとしうること、及びそれと「空想」や現実逃避という現実補足的なものとの違いを示している。ここからは、カント的「人がそれに近づこうと努めるような「統制的理念」は、まさにユートピアとして把握できることが示されよう。またマンハイムは、歴史的現実ではイデオロギーとユートピアの区別は難しいが、変革機能をもつものがユートピアであるとしていることも、我々の理解にとって重要である。

さて柄谷は、近代国民国家形成について、以下のような理解を示す。

まず16世紀以降、貨幣経済と強力な火器による軍事力を背景として絶対主義国家が生まれ、旧来の様々な身分や集団に属していた人々が絶対的主権者の臣下（臣下としては平等）になることで人民（people）が形成され、ネーションの基盤が作られた [柄谷：160]。そして市民革命によって絶対的主権者が倒され、個々人が「自由」と「平等」を獲得し、個々人の共同性が得られて、ネーションは成立し、ネーション=ステートが生まれた。この共同性はフランス革命では「友愛」という感情（sentiment）で示される [柄谷：162]。

このフランス革命以後、二つの社会主義の動向がみられ、サン・シモンやルイ・ブランなどに代表される国家社会主義の流れと、社会主義は国家を揚棄できるものであるべきであり、貨幣と資本主義に対して、代替通貨、信用、そして生産—消費協同組合（アソシエーション）の連合によって対抗しようとしたブルードンの流れである。

しかし、1848年のフランス二月革命以後、フランスでは社会主義者（サン・シモン派）であったルイ・ボナパルト（1808年～1873年）、及びドイツでは宰相となったビスマルク（1815年～1898年）によって、社会主義的な労働者対策がとられ、いわば福祉国家資本主義のプロトタイプが作りだされた。一方圧倒的経済的ヘゲモニーをもったリベラリズム（自由経済）のイギリスでも、1848年以降社会福祉政策が急速に進み、フェビアン協会のような社会民主主義が登場している。そしてフランスでは、1870年プロシアとの戦争で敗北した中、1871年、パリ・コミューンが一時的に成立した。

マルクスは、ブルードンを批判しながらも、社会主義に関して一貫してブルードンの考えを受け継いでおり、国家によって資本主義経済と階級社会を揚棄すれば、国家は自然に消えてしまう、と考えたのである。しかし、柄谷はマルクスが「国家がそれ自体、自立性をもって存在する」ことをみていないことに根本的な欠陥が生じたとみている。そのため、「マルクス主義者の運動はまさに「国家社会主義」的なものに転化してしまった。また、それはいつも民族の問題に躓き、ファシズムに屈服するか、さもなければ、自らナショナリズムを称揚するようになった」のである。かくして、19世紀末から社会主義運動は二つに分かれ、晩年のエンゲルスが是認した社会民主主義（福祉国家主義）と、レーニンに代表されるロシアのマルクス主義（ボルシェヴィズム）とに分かれ、後者は「結局、国家社会主義（スターリン主義）に帰結し」てしまったとする [柄谷：9—15]。

なお、柄谷は、世界史の動向を「中核、周辺、亜周辺という位置と関係」で説明し [柄谷：61]、「旧来の階級闘争と革命に固執した者たちは、先進国ではなく、後進資本主義国に革命を見いだそうとしました。二〇世紀の社会主義革命が、ロシア、中国、その他、すべて周辺の資本主義国でおこったことはいまでもありません。」「しかし、それらは資本主義をその先進的・中核的な場で撃つことではなかった」 [柄谷：153—4] としている。



さらに柄谷は、社会主義的理想や理念を導き出した普遍宗教に注目し、宗教を中心としないが、宗教のもつ「倫理」を失わない「世界市民的な道徳的共同体」の構築が不可欠だとする〔柄谷：180-1〕。また「ロマン派詩人・批評家コールリッジは、カントにもとづいて、空想（fancy）と想像力（imagination）を区別しました。想像力はたんなる空想ではない。その意味で、ネーションは「想像された共同体」であるという場合、それは「空想」ではなく「想像」だということに留意すべきです」〔柄谷：167〕と述べる。

我々は、カントの「人がそれに近づこうと努めるような「統制的理念」、マンハイムの「変革機能をおびる希望イメージ」、柄谷の「想像されるもの」をもって、ユートピアとして把握できるものとする。しかしそれは決して「空想（fancy）」を排除するものではない。少なくとも人々の意識を捉え、あるいは行動を引き起こす類のものは、やがてはユートピア化したり、あるいはその重要な要因となりうるものであり、広く東北アジアでの多様な状況と欧米との相互影響・連鎖の中でみていかなければならないのである。

ビスマルク以後、科学主義、人種問題（黄禍論）、民族主義、ナチズム（特にユートピアとしての「東方ゲルマン大帝国」）へと展開するドイツの動向、及びトルストイのユートピア論、そしてレーニンからスターリン時代の理想化された社会主義・共産国家「ソ連」の神話が生み出されたロシアの動向は、20世紀において東北アジアと様々に関わる。それらは以後の検討に委ねることとし、最後に「ユートピア」の東北アジアへの現れを、特に日本と中国での翻訳語を通して簡単にみてみたい。

## 5. 東北アジアへの序章 —— Utopia の翻訳

東北アジアでも、時間的に過去ないし未来に設定された理想郷・理想状態、あるいは空間的に隔絶した場所に考えられた桃源郷といったエウトピアあるいは空想は数多く存在してきた。そして、ここでみてきたような現実政治、現実社会への批判的理想を打ち出しつつ、時に宗教的衣をまといながらも、現状 *topia* の変革を提起するようなまさに Utopia 的思想・理念もあった。それらのうち、前近代中国については、『周礼』・王莽の政治や、反乱へと突き進んだ新興宗教などの理想・政治思想・ユートピアなどについて、既にある程度の検討は終えてあるが（注16）、本稿ではスペースの関係で言及しない。

ここでは、まず日本で Utopia の翻訳がどのようになされ、その内容がどのように理解され、受け入れられたかの概要をみることにしたい。

角川書店『外来語辞典』（1967年）等の辞典類によってみると、明治10年代にはトマス・モア『ユートピア』への言及が目につき始める。それらを列挙すると、次のようになる（注17）。

- ・小崎弘道の文（『六合雑誌』7、明治14年（1881年））に、「モール氏がユートピヤ」。
- ・丸善『百科全書』（中）明治17年（1884年）に、「トーマス モール氏、嘗てユトピア国の



記を作る。ユトピアは希臘の語無處の義なり」。

- ・坪内逍遙「内地雑居未来之夢」明治19年（1886年）に、「或はユトピア（架空論）をもて目する事あり」
- ・和田恒謙三『社会主義』明治22年（1889年）に、「トーマスマーアのユトピア（夢想国）」。
- ・矢野龍溪『新社会』明治35年（1902年）に、「優都美（ユトピア）」。
- ・『平民新聞』明治40年（1907年）2月14日号に、「ユトピアン」。

そして、モア『ユトピア』の翻訳も出版された。井上勤訳『良政府談』（明治15年（1882年））（翌年『新政府組織談』と改題、再版）が最初であり、荻原絹涯訳『理想的国家』（明治37年（1904年））が続く。このような「良政府」「理想的国家」という理解と同時に上の事例にもみられるように「架空論」「夢想国」という理解も示されてはいた。しかし、現在に至る日本の「ユトピア」理解に決定的な影響を与えたのは、ユトピア関係の図書を翻訳してもらった堺利彦（1871年～1933年）（注18）以下によってなされたエンゲルスの *Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft* の翻訳であった。

大内兵衛訳『空想から科学へ—社会主義の発展—』（岩波文庫、1946年9月）の大内の序によれば、日本語訳は明治37年（1904年）堺利彦によって『社会主義研究』に掲載され、昭和3年（1928年）に『社会主義の発展—空想的社会主義から科学的社会主義へ』と題して発売され、また浅野晃訳『空想より科学へ』（岩波文庫、昭和5年（1930年））もあった。大内は序で、「われわれ日本の社会主義者は、われわれの祖先の内にたゞにサン・シモン、フーリエ及びオーウェンをもたなかつたのみではない、またドイツの社会主義者の如く、カント、フィヒテ及びヘーゲルの流を汲むことの誇をもつてゐない。その故に、さういふことを知るためにも、本書を読む必要がある。」と述べていた。敗戦後の社会主義思想の昂揚の中での宣言でもある。

しかも敗戦後の日本の社会科学・思想全般、あるいは知識人全般に、社会主義は絶大な影響を与えていた。ソ連の理想化がなされてもいた。そしてこの理想化はやがて誕生した共産中国にもなされ、北朝鮮についても地上の「楽園」として喧伝し、在日朝鮮人の移住を引き起こして大きな悲劇を生み出した。知識人・マスコミも「ユトピア」を「空想」と理解しつつ、実際には独裁の下、悲惨な状態にあった「実現されたユトピア」ではなかったものをユトピア化あるいはエウトピア視していたといえよう。

このようなエンゲルスの著作の *Utopie=Utopia* を「空想」と訳してきた日本の社会主義的翻訳が、日本における「ユトピア」の理解を決定付けてしまったということができる。ユトピア=空想という蔑視感が広まったのである。これは現在においても払拭し切れていない。厚い欧米での伝統が全く切断されてしまった形で、日本にユトピア概念が持ち込まれ、定着したことによってもたらされたことによるといえよう。

なお、中国では19世紀末～20世紀初めにおいては、西欧にあるものは全て中国には古代から

あるという説明がなされがちな中で、当然のことながら『莊子』逍遙遊の「無何有之郷」や『礼記』礼運篇の「大同」が意識されていたとみられるが、辞書類を手がかりにしてみると、翻訳では音を写した「烏托邦」が多く使われて、現在に至っている。ただ、康有為（1858年～1927年）の『大同書』（注19）などのように、実際には独自のユートピアの提示であっても、孔子教の主唱者にふさわしく、あくまでも中国的伝統によって「大同」を用いている例もあるが、既に『ユートピア』が広く知られていてそれを意識していた段階でのことであったのである。また胡適（1891年～1962年）は、「自分は初め、『周礼』は戦国末年の大ユートピア（大烏托邦）の書だと認めていた」が、今は「『周礼』は偽書であり、もとより信ずることはできない」と考えていること、及び「王莽の「烏托邦」はすぐに崩壊した」としたとも述べている（「井田辨」の「答廖仲愷・胡漢民先生的信」）（注20）。王莽の政治や『周礼』をユートピアと捉えていた胡適の理解が伺われる。

また、このような Utopia の音訳が主流なのは、現代のロシア語でも同じである。また朝鮮語でも同様である。ただ朝鮮語では、日本翻訳から東アジアに広まった「理想」という言葉を用いて（注21）、「理想郷」とする場合もあるようである。またモンゴル語では同様に音訳であり、「空想」と訳することもあるようであるが、「空想」は共産主義者の間での「ユートピア」への評価そのものを表す言葉であり、モンゴル語にもそれがみられるようである（注22）。

この簡単な概観からだけでも知られることであるが、アジアにおいても、ユートピアないしユートピア的理念は、それが伝統的なものであれ、欧米からの受容・影響によるものであれ、もはやグローバルな相互影響・連鎖の中で存在しうるものとなったのである。

## 6. おわりに

本研究では上述のような日本での「ユートピア」という言葉に対するバイアスを避けて、トマス・モアの原義以来の欧米での伝統、特に社会思想概念としての「ユートピア」の伝統を尊重し、アジアでの同様な思想や理想をもユートピアとして考える立場に立つ。そこでは、特にカントの「人がそれに近づこうと努めるような「統制的理念」、マンハイムのいう「変革機能をおびる希望イメージ」、柄谷の「想像されるもの」が主軸となる。同時に、時空の変動によってはユートピアとなりうる、ないしユートピアと関わりうる可能性がある様々な「空想 (fancy)」や楽園観念等も検討の対象としたい。特にアジアではそれを欠くならば、ユートピア理念のもちうる豊饒さを痩せこけたものにしてしまう可能性があるからである。なお、文学的作品においては、Utopia と fancy は区別しがたいことが多いし、科学的ユートピアも同様である。しかし人々に受容され、現実への行動や観念面で影響を与える限り、それらを見ていく必要がある。その中には、一時的ではあれ、人々に理想・夢を現出してみせた万国博覧会等も視野に入れておく必要があろう。これが本研究で用いる「ユートピア」語義の幅である。

そして以上の議論によって、「東北アジアにおいてユートピアがあったか否か」という問いではなく、まず世界史的思想・理想の相互影響・連鎖の中で、「ユートピアはどう考えられ、そしてユートピア的理想あるいはそれらと関連する諸空想・希望的観念等々がどのように個人・集団・国家、さらには国家を超えたより広い地域に影響し、関わり、それが東北アジアではどのような様相をみせ、地域の在り方を規定しているか」と問い、具体的に解明していくことが、本研究の基本軸であることをここで確認して、東北アジアにおける「ユートピア」研究の序論としての本稿を終えたい。

## 注

- (1) たとえば、ホジソンはその著書で、現在の経済学において、「「共産主義の実験」は、せいぜい歴史的逸脱として回顧的に考察できるだけ」ないし「標準的または理想的状態からの長期的逸脱」というような理解が世界的に主流となっていることを述べた [ホジソン 2004: 3]。日本語版への序文で「社会主義的計画化システムと自由市場システムという、当時の二つの大きな政治的ユートピアの解明に取り組んでいるのであるが、いずれのユートピアも、少なくとも純粹または極端な形態では実行不可能である、と私は本書で主張した」と述べ、共産主義・社会主義的なものの存在意義を強調して、資本主義というユートピアだけではない独自の構想を示している。
- (2) アルタイ地域などのシベリア諸民族の歴史的変遷については、ジェームス・フォーシス [1998] 参照。人口等については、ユーラシア研究所 [1998] 等、及びアルタイ共和国 (<http://eng.altai-republic.ru/index.php?newlang=eng>) 等の公式ホームページその他による。
- (3) 仙台での「ロシア科学アカデミー所蔵 アルタイの至宝展」開催に当たり、2005年6月2日、ロシア科学アカデミー・シベリア支部考古学民族学研究所のパウロ副所長及びヴァシーリエフ研究員を招いて、東北アジア研究センターで懇談会を開いた際に、主としてパウロ副所長が説明したことに基く。なお、2003年にアルタイ地域で発生した地震によって、地震と女性ミイラ問題を関連付けた議論が引き起こされたが、それについては、徳田由佳子編『シベリア通信 2000年—2004年』（「東北アジア アラカルト」第12号、東北大学東北アジア研究センター、2004年）の第43号（2003年10月号）の「ミイラと地震」という記事を参照。
- (4) また注(2)のアルタイ共和国公式ホームページにも、アメリカでの関心についての関連記事がみられる。なおモンゴロイドの移動については、『科学朝日』編『モンゴロイドの道』（朝日新聞、朝日選書、1995年）参照。
- (5) なお、アルタイ共和国の西に位置するアルタイ地方には、ドイツ人が多く住んでいる。それはドイツ出身のエカテリーナII世がロシアに嫁いだのに伴って、ドイツ（プロシア）本国から入植した人々を起源とした「ヴォルガ・ドイツ人」を主体とする「ヴォルガ・ドイツ人自治共和国」（1924～1941年）が、独ソ戦勃発後に解体され、ドイツ人が根こそぎ中央アジア～シベリア方面へ追放されたことに因るもので、アルタイ地方には12万以上住んでいるようである（半谷 [2000] 等による）。第二次大戦中のアメリカに入植していた日本人と同様の過酷な状況に置かれたのである。
- (6) 「連鎖」は言うまでもなく、日本近代史研究において「法政思想連鎖」という方法に立

脚して大きな成果をあげている山室信一の用語である [山室 2001]。一般的には、(時間と場所に関わらない)「影響」という言葉で足りるのであるが、交通手段・情報伝達手段の発達に伴う人と情報の移動・伝播が多様化・活発化した近代においては、出来事や思想が直接的に、また複雑な経路で影響し、あるいは予想もできないような別な形へと、まさに「連鎖」することも多いので、理念・理想の影響関係を説明する際に有効な概念として本研究でも積極的に利用したい。

- (7) これについては、森泰男 [2001] など多数が言及している。
- (8) アリストテレス著、村川堅太郎訳 [1980] の村川の解説。
- (9) 植田祐次 [2004] によると、宣教師たちによる『布教書簡集』は1702年に第一集が出て以来、1776年までに34巻出版され、アメリカ原住民の善良さ、平等な生活が人々に影響を与えたという。
- (10) 文字通り汗牛充棟のユートピアの歴史についての中から、川端香男里 [1993]、升味準之輔 [1976] だけをあげておく。
- (11) この18世紀フランスの思潮とユートピア問題については、主として植田祐次 [2004] による。なお、レチフのユートピア小説『南半球の発見』は、1781年に発表されたが、強い社会批判性のため、広くは流布しなかったものの、社会に影響を与えた。そしてそのテキストが失われたが、200年後の1977年以降テキストが再発見されて刊行された。口絵に「飛翔するヴィクトラン」があり、主人公は人工翼を発明し、理想国メガパタゴニーを統治し、平等社会を実現した。しかし、人工翼をもち飛翔する自由は、支配者である主人公の一族のみに限定されていた、という。
- (12) 国民主権という国民国家の建前にも関わらず、対外的には国家が主権を有し、国内的にも国家主権が強力化することが、近代国家における諸問題を引き起こしている。「愛国」問題もこの建前と現実の乖離に起因する。日本では、日本帝国憲法のように立憲君主制という意味では近代的様相を見せながら、「臣民」関係が明記され、主権者は天皇であった。天皇機関説は近代国民国家理念と天皇制を調停した説でもあったが、弾圧されてしまう(文部省思想局によるすさまじい弾圧を示す秘密文書が、米議会図書館に所蔵されていたことが最近分かった。『河北新報』2006年12月17日朝刊「ワシントン共同」記事)。ようやく敗戦後の日本国憲法が「主権が国民に存することを宣言」して国民主権が確立した。しかし現在、国民個々人の「愛国」を、国家主権の考える「愛国」のなかに包摂させようとする方向が国家主権の側から進められている。これについては姜尚中『愛国の作法』(朝日新聞社、朝日新書、2006年)参照。
- (13) ゴールドラッシュ時代のカリフォルニア、スタンフォード大学等については、野口悠紀雄 [2005] が参考になる。
- (14) 柄谷行人 [2006] による。19～20世紀の国民国家・社会主義の分析をし、カントの理想への立ち返りを提言する柄谷の全体構想は既に出来上がっているが、本書はそれを多くの人に分かりやすい形で示したものである。以下の引用では、[柄谷：頁数] とする。
- (15) カント(遠山義孝訳)『永遠平和のために』(『カント全集』第14巻、岩波書店、2000年。原文は1795年)にみられる「国際連盟」的考えは、詳細は省略するが、1920年の「国際連盟」設立以前の日本・中国では、たとえば北一輝の「世界連邦」(1906年の『国体論及び純正社会主義』)と康有為の「大公政府」(1911年以前の『大同書』。注19参照。)にみられる。
- (16) 山田勝芳『中国のユートピアと「均の理念」』汲古書院、2001年。

- (17) 大槻文彦『大言海』の明治24年（1891年）版、大正13年（1924年）版にはないが、昭和14年（1939年）版には「ユートピア」があり、「何処ニモナキ想像ノ島ノ義ニテ、現実ノ社会ニ慊ラヌ人人ノ夢想セル理想郷」としている。
- (18) 1903年11月創刊の『平民新聞』では、自由・平等・博愛を掲げ、アメリカのジャーナリストE. ベラミの社会主義的ユートピア小説『顧みれば』を堺利彦が翻訳し、『百年後の新社会』などを平明文庫として発売した〔山室信一 2005：177〕。また尾原宏之〔2005〕など。
- (19) 康有為の『大同書』は、1913年、上海の『不忍』上で連載が開始され、康有為没後の1935年、全稿が出版された。これについて、康有為自身は、光緒10年（1884年）に著わしたと述べているが、疑問のようであり、光緒24年（1898年）の少し前には大同思想の形が現れていたようである〔坂出祥伸 1985〕。また朱維錚は、『大同書』は「未完成的初稿」であり、主要部分は辛亥革命の前の10年間に書かれた、と推定している〔朱 1998〕
- (20) 『胡適文存』（遠東図書公司、1953年）1集、巻2「井田辨」3「答廖仲愷・胡漢民先生的信」、『胡適全集』（胡適全集編委会〔編〕；季羨林主編、安徽教育出版社、2003年）。これは1920年1月9日の手紙。
- (21) 山室信一〔2001〕の「日訳漢語」表参照。
- (22) さしあたり、ロシア語は、Oxford English - Russian Dictionary（1984年）等、朝鮮語は、『日韓辞典』（民衆書林、1998年）等、モンゴル語は、『現代日本語モンゴル語辞典』（春風社、2001年）等によった。

## 引用文献

- アリストテレス著、村川堅太郎訳 1980  
『アテナイ人の国制』岩波書店、岩波文庫。
- 井上紘一 1997  
「オイロトの民を求めて—アルタイのブルハニズム序説—」、岩波講座『文化人類学 第5巻 民族の生成と論理』岩波書店。
- 植田祐次 2004  
『共和国幻想 レチフとサドの世界』、≪思想\*多島海≫シリーズ、法政大学出版局。
- オチル・オユンジャルガル 2005  
『清朝の対オイラド諸部統治策』、東北大学提出・博士論文。
- 尾原宏之 2005  
「堺利彦の「ユートピア」——明治社会主義における「理想」の一断面」、『初期社会主義研究』第18号。
- 柄谷行人 2006  
『世界共和国へ——資本=ネーション=国家を超えて』、岩波書店、岩波新書。
- ガーネリ、カール・J.著 宇賀博訳 1989  
『共同体主義—フリーエ主義とアメリカ—』、恒星社厚生閣。原文は1979年。
- 坂出祥伸 1985  
『康有為：ユートピアの開花』、集英社。
- 朱維錚編校 1998  
『康有為大同論二種』、三聯書店。
- モア、トマス著、澤田昭夫訳 1999

『改版 ユートピア』、中央公論社、中公文庫。改版初版は1993年。1999年発行の改版再版を使用。

中村喜和 2003

『[増補] 聖なるロシアを求めて 旧教徒のユートピア伝説』、平凡社、平凡社ライブラリー。初版は1990年、「日本国白水境の探求」の初出は1977年。

野口悠紀雄 2005

『ゴールドラッシュの「超」ビジネスモデル』、新潮社。

半谷史郎 2000

「ヴォルガ・ドイツ人の強制移住」、『スラブ研究』47号。

フォーシス、ジェームス著、森本和男訳 1998

『シベリア先住民の歴史——ロシアの北方アジア植民地 1581—1990』、彩流社。原文は1992年。

プラトン 1975・1976

『プラトン全集 第11巻』、岩波書店、1976年、田中美知太郎訳「クレイトポン—徳のすすめ—」、藤沢令夫訳「国家—正義について—」。『プラトン全集 第12巻』、岩波書店、1975年、種山恭子訳「ティマイオス—自然について—」、田之頭安彦訳「クリティア—アトランティスの物語—」。

ホジソン、G.ジョーフレー著 若森章孝・小池渺・森岡孝二訳 2004

『経済学とユートピア—社会経済システムの制度主義分析—』、ミネルヴァ書房。原文は1999年。

升味準之輔 1976

『ユートピアと権力—プラトンからレーニンまで—』、東京大学出版会。

丸山武志 1999

『オウエンのユートピアと共生社会』、ミネルヴァ書房。

マンハイム、カール 1971

「イデオロギーとユートピア」、高橋徹編集『世界の名著 56 マンハイム オルテガ』（中央公論社、1971年）による。原文は、Ideologie und Utopie（1929年）。

森泰男 2001

「エウトピアからユートピアへ」、井口正俊・岩尾龍太郎編『異世界・ユートピア・物語』九州大学出版会。

山室信一 2001

『思想課題としてのアジア 基軸・連鎖・投企』、岩波書店。

山室信一 2005

『日露戦争の世紀』、岩波書店、岩波新書。

ユーラシア研究所編 1998

『情報総覧 現代のロシア』、大空社。

※ 本稿は、科学研究費補助金(基盤B)「東北アジアにおけるユートピア思想の展開と地域の在り方についての総合的研究」(平成17年度～20年度。山田勝芳代表)の研究成果の一部である。